

保育における自然環境を通したいのちの教育の在り方

ー虫類を介在したいのちとの出会いー

○齊藤 加奈 (東京家政大学大学院生) ※ 大澤 力 (東京家政大学)

はじめに

近年、いのちの教育の重要性について注目が集まっている。しかし、中教審(第197号)の答申で「子供達が様々な体験活動を通じて、生命の有限性や自然の大切さ、自分の価値を認識しつつ他者と協働することの重要性などを、実感し理解できるようにする機会(中略)が限られている」との指摘がある。このように、豊かな心や人間性を育む教育には課題が残されている。

そこで、本研究では日々保育の中で子どもたちと身近ないのちの出会いを記録考察し、乳幼児期におけるいのちの教育の望ましいあり方について検討していく。特に本論では、子どもたちが体験活動を通してどのようにいのちと出会い、他者との協働の中でいのちについて考えるのかに重点を置き考察していく。

研究の目的

日常保育における自然との触れ合いを記録観察し、身近ないのちとの出会いの場面について検討する。特に、いのちの学びへの人的環境の影響を取り上げ、乳幼児期におけるいのちの教育の望ましいあり方を考察する。

研究の方法

保育所における、子どもたちの日常保育の姿を記録観察し、身近な「いのち」との直接的な出会いを捉えていく。その際、いのちの学びに影響を及ぼしているであろう人的環境を取り上げ分類することで、乳幼児期におけるいのちの教育の望ましいあり方の検討を進める。

結果と考察

事例:「ザリガニの世話」

4歳児クラスでは、2016年の7月頃から、ザリガニを飼育している。当初は、ザリガニを触ったり、住処として使用している石をずらしたりしていた。12月のある日、女兒Jがザリガニにエサを与えていた。そこに女兒HとMも加わりエサを与える。女兒らは、どうにかしてザリガニのハサミにエサをつかませようとするものの上手くいかず、そのうちにザリガニに触ってみたり住処を動かしてみたりする。そこに様子を見て

いた保育者が「隠れる場所がないとザリさんて嫌なんだよ。恥ずかしがりだから」と声をかける。女兒たちは、保育者の言葉に納得し、執拗にザリガニに触ることなくエサやりを続けた。しばらくして、ザリガニの水を夕方に替える約束(水道水ではなく日光に当てた水を使うために夕方に替えることを保育者が説明する)をすると、周囲の友達にもそのことを伝える。その後、広いところに出してあげるためにたらいへザリガニを入れると、数名の他児が集まり触り始める。ザリガニが逃げ惑ったり、跳ねたりする様子が楽しかった子どもたちは、次第にザリガニを強く触るようになる。中には、ひっくり返ったザリガニの姿を見て、「美味しそう」という子どももいた。すると子どもたちの中から、「強く触ったら)かわいそうだよ」や「(もしかしたら)足が取れちゃう」という声上がる。そこに保育者も加わり、「いじわるするのは嫌だよ」と伝えると、「尻尾を持つといいよ!」という提案があり、触り方を工夫する。その後、保育者とザリガニの隠れ場所を石で作りながらザリガニと関わる。

上記の事例では、子どもたちの行動が揺れ動く様が見られる。ザリガニは時にクラスの員となり、時に玩具、食する対象となる。これらの姿は、矛盾を繰り返しているように感じられるが、この矛盾を経験することは、深いいのちの学びへとつながるのだ。

上記の事例ともう一例(詳細については当日発表予定)からいのちの学びに影響を及ぼしているであろう人的環境を抽出すると、保育者・友人・子ども自身の経験に分類することができる。このことから、身近にいのちの存在があるだけでなく、人的環境としての保育者や友人、子ども自身の経験と知識がそこに加わることによって矛盾が生まれ、それを繰り返す経験の中でいのちの学びが深まっていくと考えられる。子どもは環境に働きかけ、環境から働きかけられることで成長していくのである。しかし、子どもが対自然環境の関係だけでは、学びが不十分なのではないか。つまり、環境との相互作用に人的環境が加わることで、子どもたちはいのちの学びを深めていくのである。

※人間生活学総合研究科修士課程